

東京・神奈川における 《新方言》の地理的分布

—都立大・ICU調査中間報告—

井 上 史 雄
大 江 祐 子
塚 本 敦 子
藤 本 泉

この論文では、東京付近における《新方言》について、老若の地理的分布の例をいくつか提示する。新しい言語表現の発生と伝播に関して、都心と郊外との相互作用の観察される例である。

《新方言》にまつわる理論的問題、および東京付近における最近の言語変化については、報告書がある。⁽¹⁾ また、東京から福島県にかけてのグロットグラム調査⁽²⁾や、東京都内8ヶ所でのサンプリング調査でも、《新

方言》の具体例をいくつか指摘できた。ここでは、従来気づかれていなかった語を中心に、地理的分布という観点から扱う。

資料は、東京都立大学と国際基督教大学（ICU）の言語学・言語地理学の受講者の共同レポートに基づく。これまでに5回の調査が行われた。（表参照）

このうち、①②の「片足跳び」「着られる」については、「東京都方言地図——結果の一部——」（1981.9）

表

	時期	地域	項 目
① ICU	'81春	三 多 摩	L A J, 「神奈川県言語地図」 ⁽⁴⁾ との共通項目
② 都立大	'82冬	都 区 内	同 上
③ ICU	'82春	三 多 摩	新方言・流行語関係
④ 都立大	'83冬	都 区 内	同 上
⑤ ICU	'83春	神奈川東部	同 上

をフリーフレットにして、関係者に配布した。また①②のうち「ひき蛙」「しあさって」「まつかさ」など項目については、「日本語研究」第5号に発表した。本報告は、調査③④⑤の結果の一部である。

なお、調査③④⑤の参加者は、下記の通りである。

③（ICU）石井透、岩本遼億、上田千加子、江口明子、小野塚智美、久保博美、榎原啓子、清水薫、関口由佳、関谷百子、原光広、松井晶子、森紫織、Michael Harrington、Barry Hayter。

④（都立大）浦口直樹、大島資生、小川路子、菅野清孝、島村佳伸、竹沢一孝、土屋義幸、中川望、藤本良平、宮沢理恵子、渡辺由紀子。

⑤（ICU）浅井真由美、阿部りか、磯村香代子、上原典子、大江祐子、小島輝雄、田所佐苗、塚本敦子、甲久喜宜昭、姫野佐智子、西陽子、村上久仁子、森開

久美子。

1. 「シャープペンシル」

若年層の図をみると、神奈川東部のほぼ全域と、東京都のほとんどの地域で、シャープペンの形がみられる。しかし、東京都区内にはシャープペンもシャープペンと同じ程度に分布している。シャープペンシルという語形は、若年層にはほとんど使われていない。老年層の図をみると、最も多いのが、シャープペンシルで、特に東京都区内南部に多い。次いでシャープとペンシルが広く分布している。また、老年層には無回答も多く、東京都では約2割、神奈川では約4割である。

吉沢・石綿編「外来語の語源〈角川小辞典26〉」によると、シャープペンシルという語形は和製英語である。1837年米国で Ever Sharp の商品名で売り出され、明

治時代にシャープペンシルという名が日本でできたようだ。訳語としては、「繰出し鉛筆」などと言われたが、定着しなかったようで、老年層の図を見ても、和語ふうの言い方は僅かである。

シャープペンシルを略して、最初の頃はシャープ、またはペンシルと呼んでいたらしいことが老年層の図で分かる。若年層の図によると、最近ではほぼ全域でシャープペンに代った。シャープ、またはペンシルは、商品名や鉛筆の名前などと、同音衝突の危険もあり、不適切な命名と考えられたのかもしれない。

2. 「割り込み」

以下2項目は、調査④⑤で行った結果である。最初に老年層の図から見ると、ワリコミが圧倒的に多いことがわかる。現在では、「割り込み乗車は、お止め下さい」というように、駅の放送など、公共の場でも使われている。従って、ワリコミは、最も一般的に使われる、共通語・標準語的な性格を持つ語と考えてよいだろう。その他、ゴマカシ、ズルイコトが各1地点ずつあったが、これは、適当な語句が思い当たらなかったため、より広意義の語を与えたものである。また、(若年層に多い)ヨコハイリは、鎌倉(小坪)に1地点だけだが、インフォーマントの年齢が比較的低く、小学校長をしていたことまで考慮すると、若年層の影響を受けたものと思われる。

他にズルイ、コスイという形容詞形での回答が2地点あるが、これは質問そのものに問題があったのではないか。「行為そのものを何と言うか」という問いならば、当然答えは名詞になるからである。

次に、若年層の図では、ワリコミが目立って減少し、代わりに新しい語形のヨコハイリ、ズルコミ、そして1地点ではあるが、バンヌカシが現われている。特に、ヨコハイリは、東京では1地点だけだが、神奈川では半数以上を占め、相模原から県中部を経て、湘南方面や横浜市北部にかけて、広く分布している。反対にワリコミは、津久井郡から、相模線・相模鉄道線にかけて、横浜市内3地点で回答があった。市内をさらに詳しく調査しないと、正確なことは言えないが、神奈川県中・東部に、ヨコハイリがかなりしっかりと定着しつつあり、東京にも飛び火していることから、ヨコハイリの勢力は、今後も一層強まって行く可能性があるだろう。ただ、神奈川での分布経路があまりはっきりしていないうえ、ヨコハイリは、ワリコミに比べて語感が幼なく、地域的な子供の言葉とも考えられるので、これが、年齢差を超えた新方言になるかどうか

は、疑問である。⁶⁾東京では、また別の新しい語形、ズルコミが見られる。これは、ズル(イ)とワリコミの折衷形であり、かなり最近の流行語の一つとも考えられる(あるいはヨコハイリよりも新しいかも知れない)。ズルコミは、神奈川でも東京寄りに1地点見られるが、これは東京からの流入であろう。そうすると、この語もまた、今後分布範囲を広げるかも知れない。神奈川には以上の他、バンヌカシも1地点だけ見られる。この調査の結果だけではわからないが、この語も、語感からして、ヨコハイリと同様、限られた地域で使われている、子供の言葉かと思われる。

3. 「びんた」

ビンタについての調査は、東京都23区内及び神奈川県(相模川以東)で行われ、合計13もの言い方が見られた。しかし、老年層ではビンタが、若年層ではビンタが大多数を占めており、他の言い方は1、2ヶ所ずつで見られるだけであった。

老年層で使われているビンタは、共通語形である。しかし、若年層を見ると、このビンタがビンタにすっかりとって代られている。東京23区内及び神奈川県において分布の見られるビンタは、従って、現代の若い世代において新たに発生し、勢力を広げつつある非標準語形、すなわち、新方言と言うことができよう。ビンタがどこでどのように発生し、伝播、普及していったかは、しかし、この度の調査の結果だけでは、断言できない。神奈川県と隣接する東京都下での調査がなされていないため、東京都におけるビンタの分布の実態がつかめず、神奈川県との連続性がわからないためである。また、老年層においてもビンタの使用は東京の下町で2件、神奈川県でも2件見られるので、どちらの地域に先にビンタが普及したのかかわからない。若年層を見ても、ビンタが大部分ビンタにとって代ったものの、ビンタの使用も東京・神奈川共にまだ少数見られるので、ビンタの普及率によってもその発生・伝播の過程を知ることはできない。

ビンタの発生・伝播・普及の過程は明らかではないが、その発生理由は容易に予想されよう。昨今では、「^{びん}た」という語は殆ど聞かれなくなり、死語になりつつある。または、ピンという語は聞いたことはあっても、それが正確にどこを指すのかを知っている人は稀であろう。鹿児島方言のピンタ(頭)と結びつける説もあるが、いずれにせよ、語源自体が死語となっている。そこで登場するのが民間語源である。人のほおを平手で打つ時に出る音は、日本語では「パン」や「ピ

シャリ」などp音の擬声擬態語で表わされることが多い。ピントよりピントの方が音的に平手打ちのイメージに合うのである。これが、ピントがピントにとって代り、勢力を広げつつある所以であろう。

共通語形ピントに代り、新たに普及したピントは、明らかに新方言と言え、発生理由も予想することができるが、その発生・伝播・普及の過程を知るためには、東京都下など未調査地域での調査が必要であろう。

4. 「ヤッパ」

以下3項目は、語形をあげて使用状況を尋ねた、いわゆる「理解語」の調査結果である。

このヤッパは、ヤッパリ(ヤッパシ)の末尾音が脱落したものである。

まず、老年層の図から見ると、ヤッパと「言う」の回答は、東京中部以西に多い。それに比べて、神奈川県は2地点しかなく、東京とのつながりも見られない。もし若年層からの影響を考えないことにすると、東京中西部でかなり以前からあった言い方で、それが東京東部及び神奈川県へと広がって行ったと考えられる。「聞く」の分布が、「言う」の分布の周辺に広がっていること、「聞く」が、町田付近から神奈川県中央にかけてと横浜市街に多いのは、東京から鉄道づたいに広がったと思えることも傍証になる。)また、奥多摩、東葛西、藤沢などに「言う」が散在しているのは、それぞれに散発的に生じたと考えることもできよう。

さて今度は若年層の図の方へ目を移してみよう。一目でわかる通り、全地域で「言う」が大部分の回答となっている。「聞く」又は「聞かない」と答えたのは、笛吹、津久井、戸塚や、墨田区周辺で、依然として影響が及んでいないのであろう。だが、このような急激な広がり方を考えると、近い将来、これらの地域にも、ヤッパは浸透していくと見られる。また、この場合に、ヤッパはある地域から、その隣接する地域へ、と徐々に広がっただけでなく、一種の流行語として、一斉に広がったと考えられる。この調査地域外の、千葉・埼玉・神奈川県西部でも同様の調査をすると、老年層での分布や、それ以降の広がり方が一層明らかになるであろう。

ここで、やはり1982年から83年春にかけて行なわれた、都立大とICUによる調査のうち、ヤッパのヴァリエーションであるヤッパシと比較してみることにする(地図省略)。ヤッパシは、老年層、若年層ともに過半数が「言う」と答えていて、ヤッパほどに、両年齢層の使用に開きがない。老年層では、ヤッパを使わなくても

ヤッパシを使う人が多いが、ヤッパを使っている人が必ずしもヤッパシを使っているわけではないようである。また、ヤッパシは、ヤッパの使用地域でない東京東部や、町田、神奈川全域にも分布している。若年層では、ほぼヤッパと同じ分布だが、東京の山手線西側に「聞く」と「聞かない」が並んでいる。以上から、老年層で、ヤッパシはヤッパよりも一般的であったことがわかる。

5. 「イエテル」

これは、たとえば「君の言っていることは正しい、適切である」などという意味で用いることばである。最近、急に使用者が増加していると考えられている。

地図で「言う」と回答した人の分布を見ると、若年層ではほぼ全域で使用されているのが分かる。それに反し、老年層ではほとんどの人が「聞かない」と答えており、かなりはっきりとした違いがある。老年層でも「言う」と「聞く」を回答した人をあわせると2割以上いて、その分布は、都区内もあれば郊外もあって、限定はできないと考えられる。

イエテルは、イエテルからできたと考えられる。イエテルは、たとえば、「それは言える」という場合のイエテルにテイルがついた形で、「可能動詞+テイル」という表現の例であろう。しかし、こうしたことは考えず、イエテルを流行語として使う若い人も多い。

イエテルがいつごろから使われだしたかはこの地図では不明である。世代と地域の両面から調査し、グロットグラムにまとめてみると、そうした疑問への解答がある程度明らかになるかもしれない。ともかく、このイエテルが広まるには、社会的または心理的な原因も考えられそうで、発生定着のメカニズムを知るには適当な新方言の例であろう。

6. 「スキクナイ」

理解語として調査したスキクナイは、まず老年層では、「言う」という人が東京都と神奈川県に各1人で、「聞く」という人も全部合せて9人しかなく、他は皆「聞かない」という人であった。「言う」と答えた2人の地域は全く離れているので、両者の間に地域的関連性はないと思われる。しいて関連性を見つけるとすれば、両地域とも、若年層の人は「言う」と答えているので、若年層の人から影響を受けたと考えることはできる。「聞く」と答えた老年層の人々には東京の柴又、両国などの下町から、羽田、神奈川県北東部にかけて連続性が見られる。老年層の言語地図を見る限りでは、東京の下町で使われ始めた言い方が、神奈川県へ広が

っていったと言うこともできようが、これだけの資料で断言することは避けたい。また、三多摩地域でも2件離れて、「聞く」という回答があるのも説明できない。

若年層を見ると、もう既にスキクナイという言い方は浸透していて、東京都においても神奈川県においても「言う」という人が大多数を占めている。その他、自分では言わなくても「聞く」という人が殆どで、「聞かない」と答えた人は僅か1名であった。老年層では使用する人がごく少数であり、若年層において大きな勢力を持って広がりつつあることを見れば、スキクナイは新方言である、ということができよう。

しかし、若年層におけるスキクナイの地図を見ても、「言う」「聞く」「聞かない」の分布に規則性は見られない。二世帯という短期間のうちに急速に広まった言い方で、既に現在では標準語形スキデハナイに大方取って代ってしまった後なので、その発生・伝播・普及の過程は定かではない。老年層においては、逆に、まだ使用はごく少ないため、その発生・伝播の過程は予測できない。このように急速に広まった言い方については、老年と若年の間の世代、壮年層の調査もしてみれば、その伝播の途中過程を知ることができるかもしれない。

このスキクナイという言い方の発生の言語的理由としては、「チガカッタ」についての説明と同様に、日本語の品詞と意味の不一致をあげることでできよう。「好き」は本来、形容動詞であり、否定形はスキデハナイとなるべきであるのに、スキクナイは「好き」と

いう形容動詞の語幹に形容詞の活用語尾「く」をつけて否定形を作ったものであり、形容詞としての活用をしている。これもチガカッタと同様、意味的に形容詞的であるところから存在していると考えられるだろう。

以上、共同調査の結果の一部を報告した。末筆ながら、面接調査にお相手下さった、多くの方々に、心から御礼申しあげる。

- <1> 井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』（自家版、1983）
- <2> 井上史雄「誤用の社会言語学」『月刊言語』12-3（1983）
- <3> 目下整理中
- <4> 神奈川県立博物館『神奈川県言語地図』（1979）
- <5> 木川行央他「東京都の方言分布」『日本語研究第5号（1982）
- <6> その後、西日本各地でヨコハイリというらしいことがわかった。
- <7> 井上史雄「東日本の《新方言》」『東京外国語大学論集32』p. 160

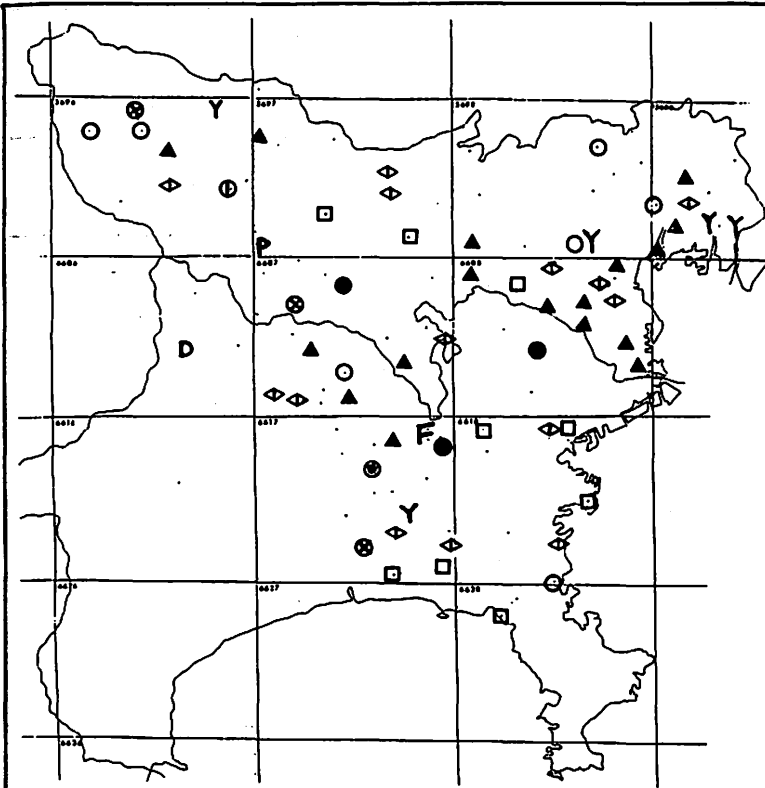
井上史雄・東京外国語大学助教授
大江祐子・国際基督教大学学生
塚本敦子・国際基督教大学学生
藤本 泉・東京都立大学学生

東京・神奈川
言語地図

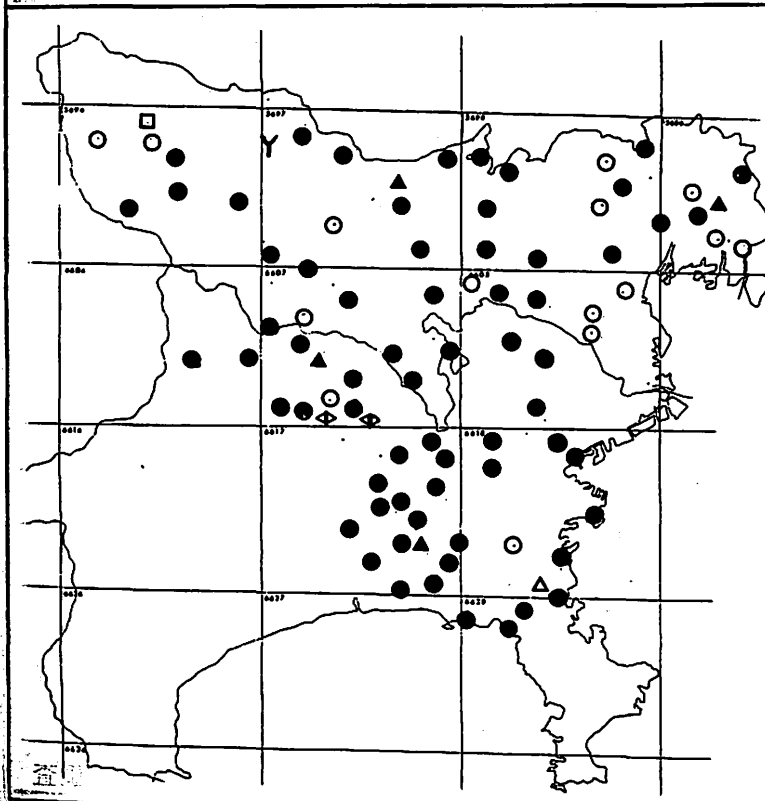
1. シャープペンシル

凡例

- シャープペン
- シャープペン
- ▲ シャープペンシル
- ペンシル
- ◇ シャープ
- ⊕ シャープペン
- △ シャープ
- ⊙ オシダシエンピツ
- ⊗ エンピツ
- Y ボールペン
- P ペン
- F マンネンヒツ
- D サンシャペン



老
若



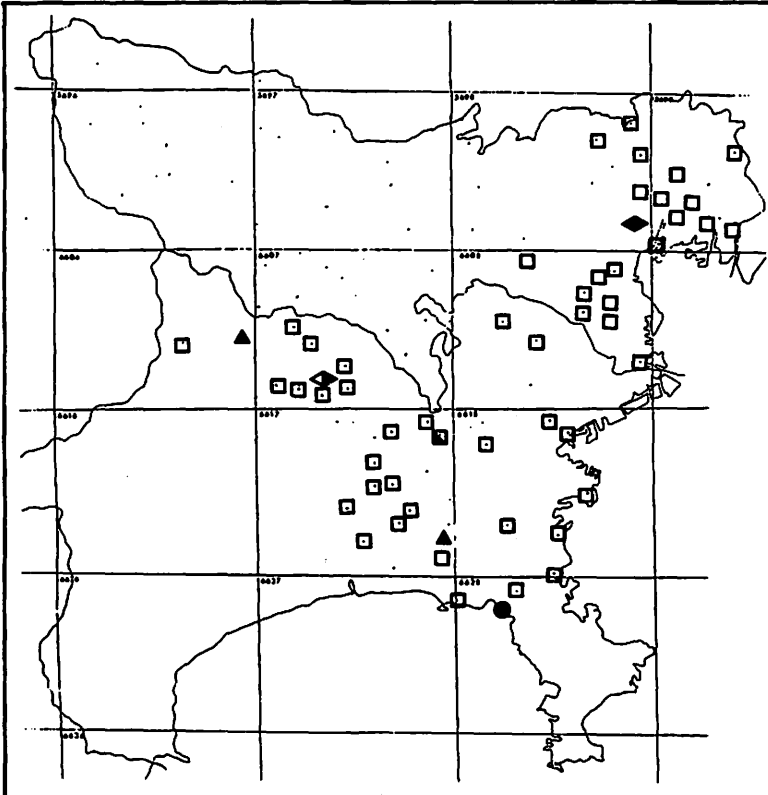
都立大・ICU調査

東京・神奈川
言語地図

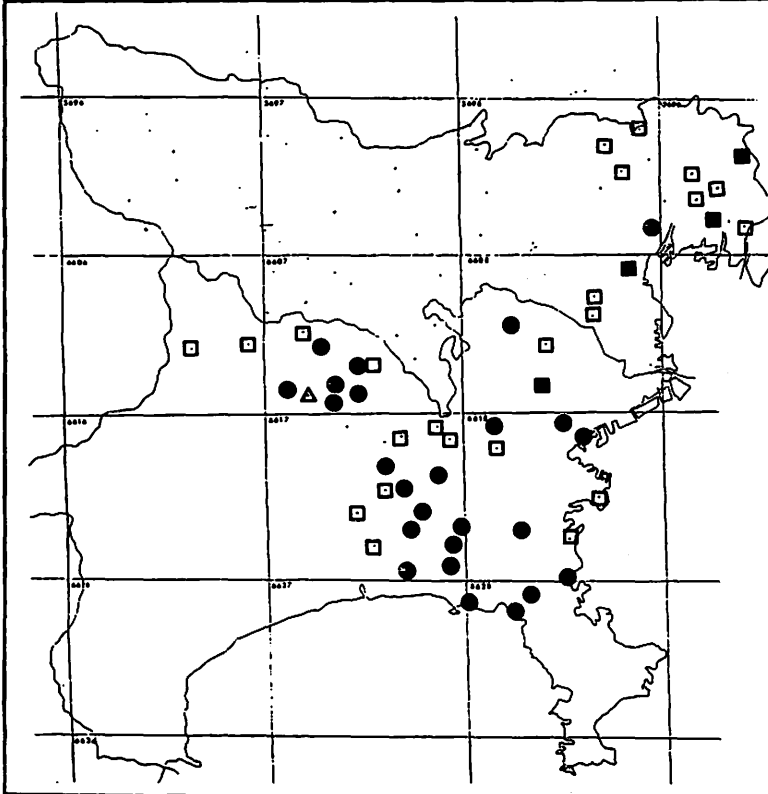
2. 割り込み

凡例

- ヨコハイリ
- ワリコミ
- ズルコミ
- ▲ バンヌカシ
- ズルイコト
- ▲ ゴマカシ
- ◆ ズルイ
- ◆ コスイ



老
若



都立大・ICU調査

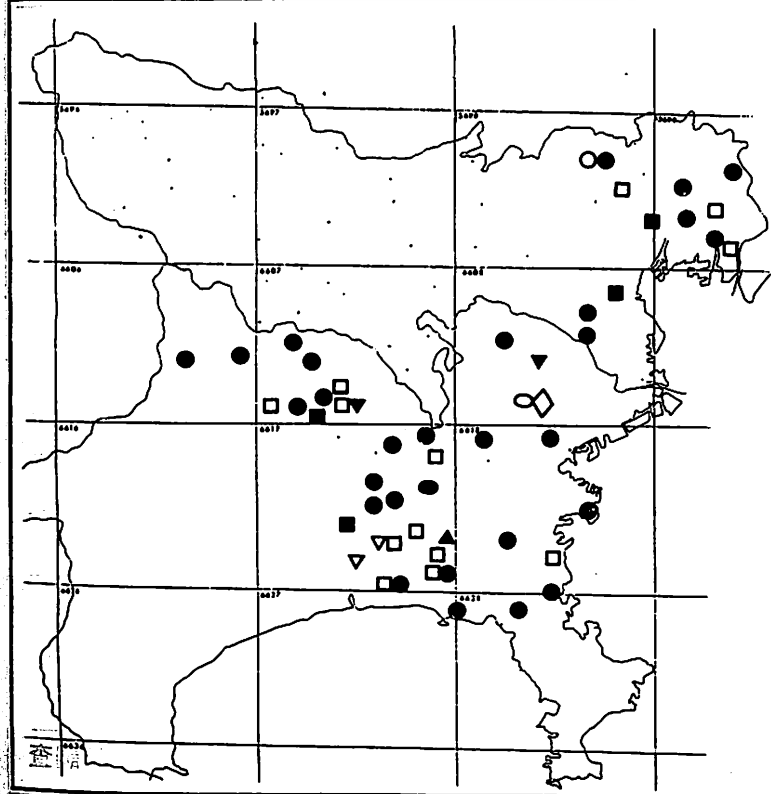
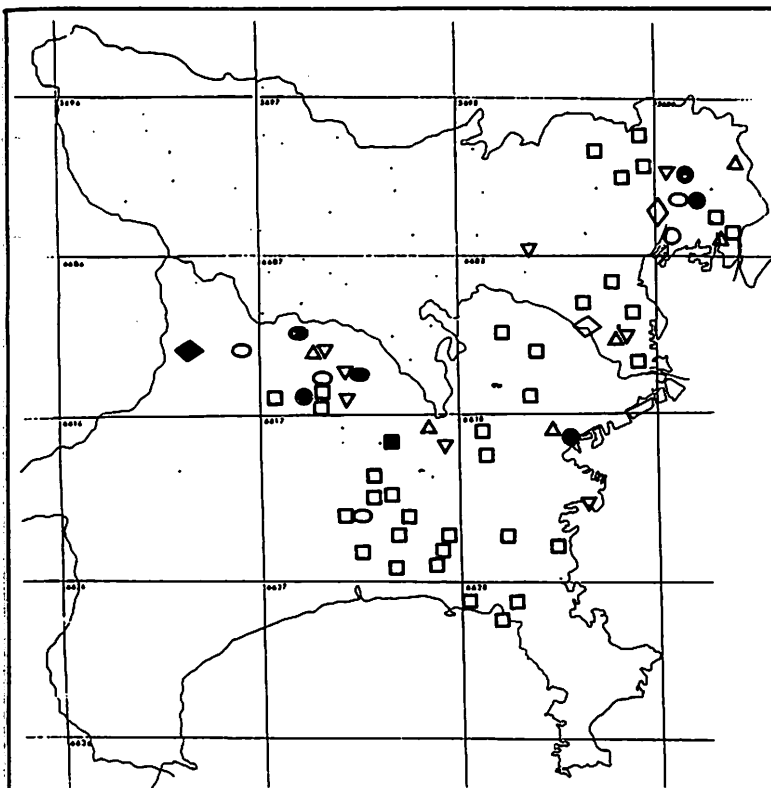
東京・神奈川
言語地図

3. びんた

凡例

- ピンタ
- ピンタ
- ハリピン
- ▲ ナブル
- ▽ ヒッパタク
- ▼ ヒラテ
- ヒラテウチ
- タタク
- プッタク
- ◇ ブツ
- ◇ パンチ
- ◆ ショーキスル

老
若



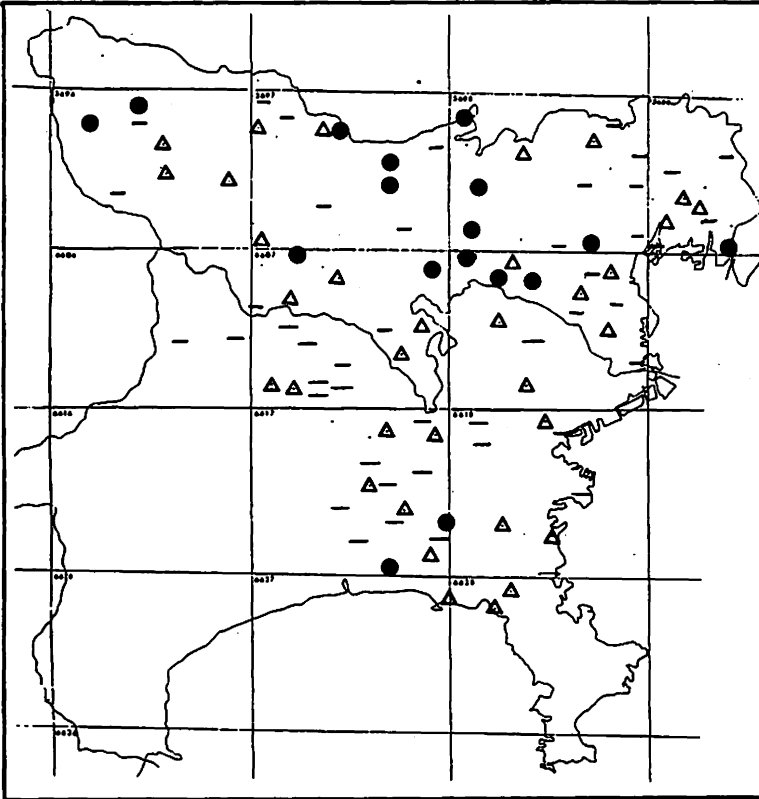
都立大・I C U調査

東京・神奈川
言語地図

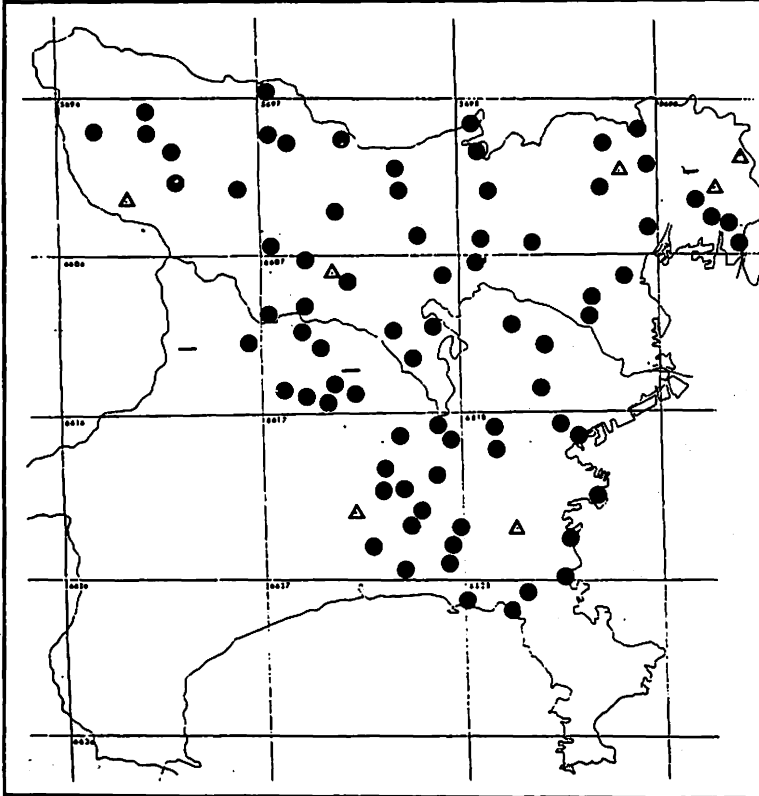
4. ヤッパ

凡例

- 言う
- △ 聞く
- 聞かない



老
若



都立大・ICU調査

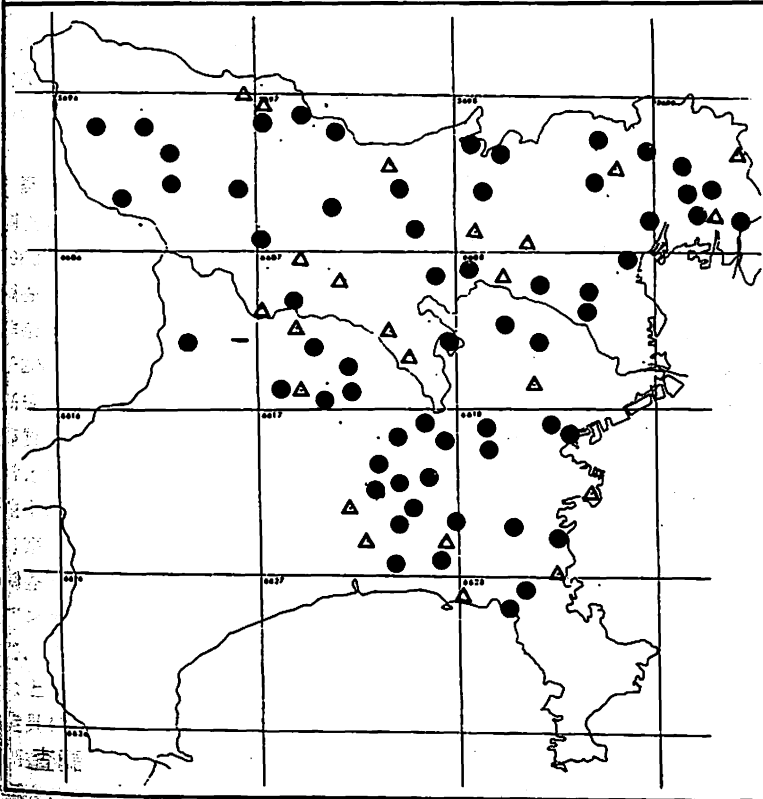
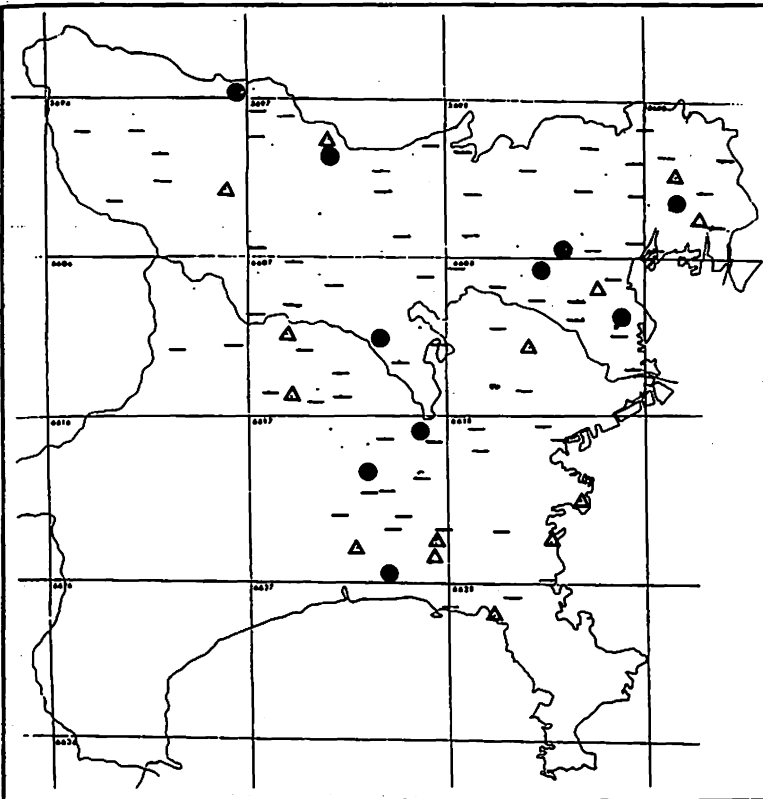
東京・神奈川
言語地図

5. イエテル

凡例

- 言う
- △ 聞く
- 聞かない

老
若



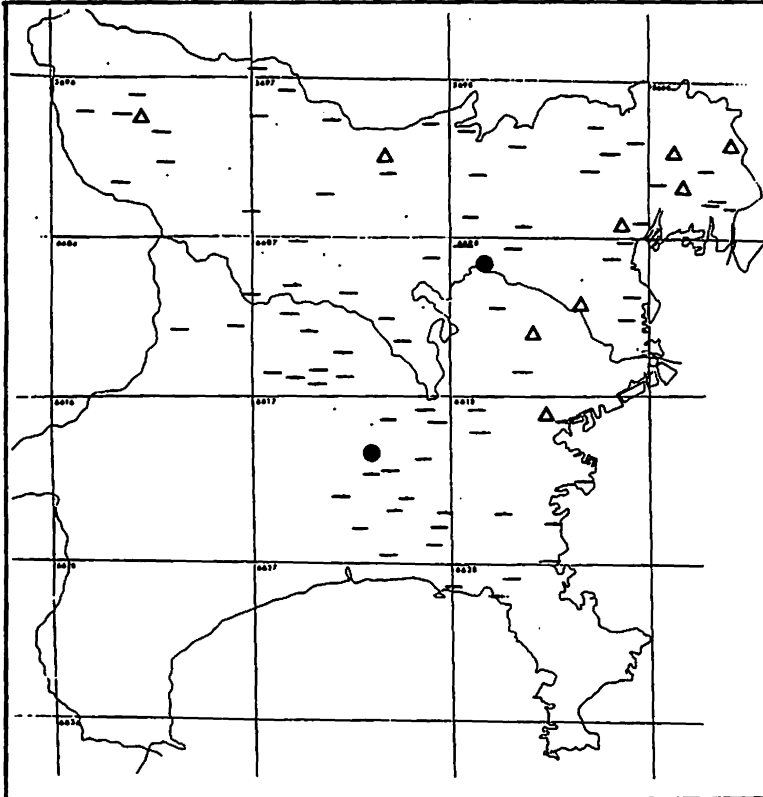
都立大・ICU調査

東京・神奈川
言語地図

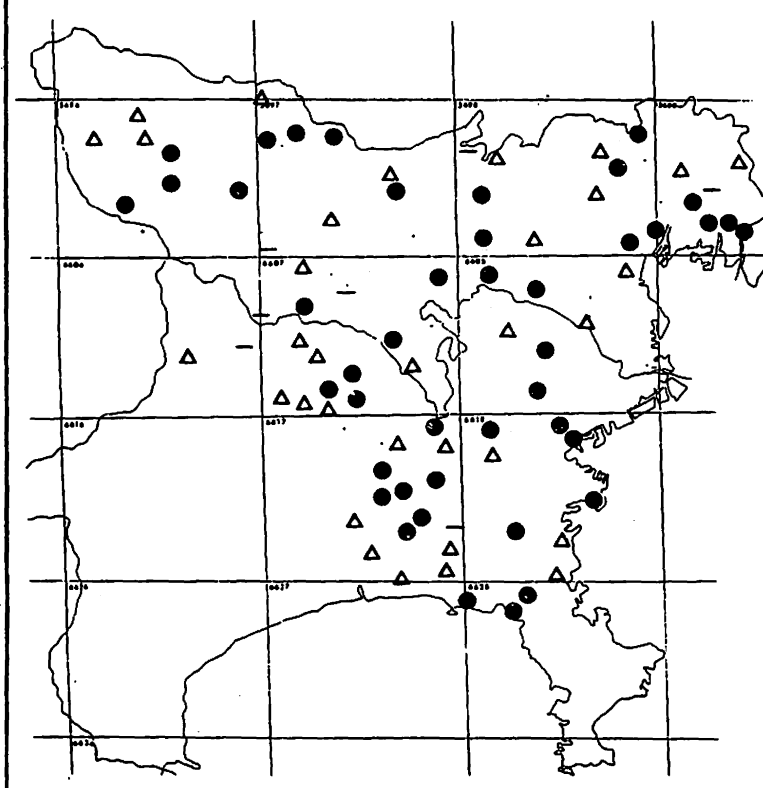
6. スキクナイ

凡例

- 言う
- △ 聞く
- 聞かない



老
若



都立大・ICU調査